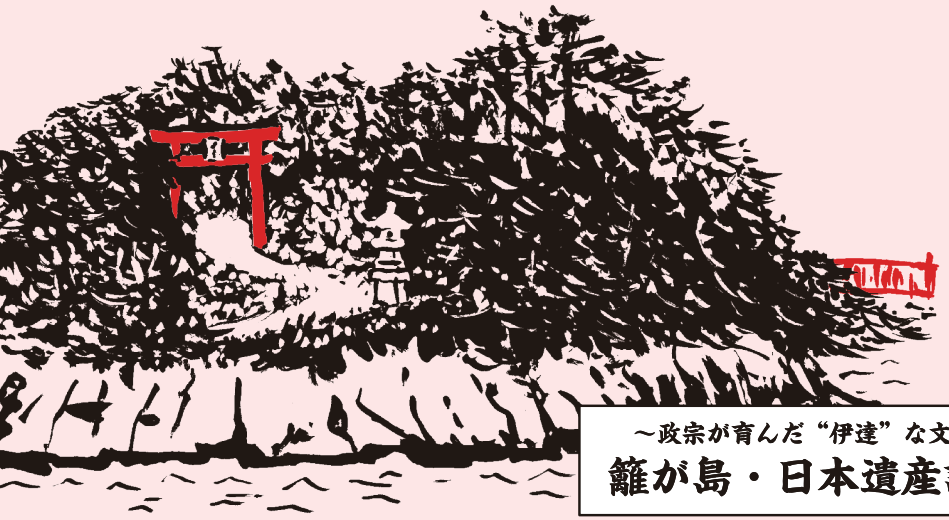
おくのほそ道の風景

籬島

まがきじま

その2

籬神社奉賛会



～政宗が育んだ“伊達”な文化～

籬が島・日本遺産認定

籬神社神事のご案内

・月次祭　毎月　１日　午前１１時
（但し１月は６日午後１時）
・前夜祭　７月３１日　午後３時
・本祭　８月　１日　午後１時

いずれも、島内籬神社にて執り行います。
どなたでも参拝できます。

通常、橋の扉は施錠していますが、毎月１日と土曜日曜祝日は、午前１０時解錠、午後４時施錠しています。

籬が島 HP

政宗が育んだ伊達な文化
構成文化財 32「籬が島」

鹽竈神社 HP
曲木神社の御由緒

籬島 その２ 令和８年５月発行

現在、籬島には昔を偲ぶ面影は全く見当たらない。ただ島の中ほどに、二つ三つ朽ち果てた大樹の根方が残っている。その一つの根張りは、一抱え半もの大木であったろうか。今その根方にそっと手を触れると、ほのかに遠い時の流れが甦ってくる。

昔、この島にはこんな大木が島の中央に生い茂り、その周辺には、曲がり巧みな木々があたかも自然美を競うが如く立ち並び、その景観は例え様もなかったという。

また、下の海辺は、打ち寄せる白銀岩に砕けて飛び交い、卯の花が咲けるが如くと、和歌に詠まれたすばらしい眺めだった。

その日、籬の海は穏やかだった。島の周囲には網手引く漁夫に交じり、小舟を操り、舟遊びする都人の優雅な姿が、まさに一幅の絵のように醸し出されていた。こうした情景を胸に、中央の籬神社に詣でると、また様々な思いが胸に去来する。

そもそもこの神の御縁起は、安永別当法連寺記によれば、古くからこの島に伝わる神詞を、「まがき明神と号す」と明示されることにより始まる。

以来、長い間移り変わる時代の間に、様々な変遷を経て、ようやく今日に至ったが、現在は、敬神篤き奉賛会によって熱心に平穏に祀りが執り行われていることは、誠に喜びに堪えない。

神社の後方に、弁財天の絵像を刻んだ石碑が建てられている。碑文の意味は解読できないが、奥州何寺水門彫刻石工千葉不与□衛と刻してある。

弁財天とは、河川、海の神と言われているが、二百年前何故この島を選んで建立されたのであろうか。いずれわだつみ信仰の篤き人の寄進によるものであろう。

島の南隔には。岩を刻んだひなびた階段が苔むして残っている。長い間打ち寄せる荒波に削られた跡も生々しく、その昔、往時を偲んで島を訪れた文人墨客。その中には、仙台藩の地誌を作った佐久間洞厳も塩松勝譜の舟山万年の姿もあったであろう。

又、祭祀の際、神事に携わった法連寺の坊中も氏子の地元衆も、この階段を上り下りしたであろう。

その昔、「水清く梅花に似たる磯貝、波間に浮かぶ如し」と言われた波際も、今はどんよりとして往時の面影は見られない。

島上南端に、尾島の神と刻んだ小さな祠が、寂しげにある。これはその脇の碑文によると、塩竈町長名で、大正十年、築港造成の際、対岸尾島岬の先端弁天島に座しありしを、この島に変座するとの旨、記しあり。

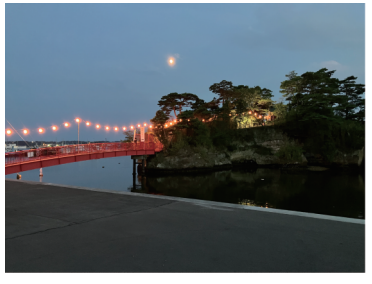
ある説話によれば、鹽竈明神はその始めに、南の弁財天、北のまがき島に夫々の神を配し、海の前衛に当たらしめたと言う。

こうした意味からも、一日も早く既に完成したふるさと築港の地に、再び遷座されるよう願って止まない。

ふと気がつくと、かんだかいガイドの声を残して、観光船が通り過ぎるところだった。

「皆様、左に見えるあの島が、奥の細道に出てくるかの有名な籬島であります」

籬の海は、その日も静かだった。

（滝井博著「籬島思考」梗概についてより）

注「籬島思考」は、社殿造営四十周年記念として平成三年に、籬神社奉賛会から刊行された小冊子です。